

眞のヒーロー 誕生物語

～ご縁に感謝し、恩返しを想えば、
誰でもヒーローになれる～

これは福島県郡山市で伺った物語です。

知人から元気な飲食店があると聞いて、行ってみました。会社名は、夢成株式会社。代表の鈴木厚志さんに、「ユニークな社名ですね」と聞いてみました。返ってきた答えです。

感動とありがとうが溢れる飲食店を目指しつつ、各自の夢も共に成し遂げる会社にしたい。その願いを社名にしました。

私たちは、従業員をスタッフやアルバイトとは呼ばず、俳優さん、女優さんと呼んでいます。店舗という舞台の上で、お客様に楽しんで頂く役柄を演じているからです。

臥龍さんは、スペシャルオリンピックピックスというのをご存じでしょうか。I O Cに認められた三大オリンピックピックスの一つ、知的障がいを持つアスリートが出演します。夢成には、このオリンピックピックスに出演した男、映画「フォレストガンプ」の

ように、自分の新しい可能性に賭け、走り続けた男がいます。私たちは、彼のことを「ヒーロー」と呼んでいます。いい役柄名でしょう。臥龍さんも、「ヒーロー」に会ってみませんか？ そして紹介してもらいました。以下は、「ヒーロー」の言葉です。

こんにちは、棚橋直也です。「ヒーロー」です。困った人がいれば、すぐに駆けつけて、みんなの役に立ちたいから。でも夢成に出会うまでの僕は、他人のためには何かをするなど考えたこともなく、いつも「何の為に生きているのだろう」と考える、ヒーローとはかけ離れた存在でした。

5歳からの僕の記憶。両親と兄との4人家族。家賃も払えず、食べることをすら大変な家庭でした。僕には知的障がいがあり、父からは虐待を受けていました。家族にとって、障がいを持つ僕は迷惑な存在。僕はいつも家族の中で、一人ぼっちでした。

ある日、事件が起きました。両親のケンカが始まり、父から僕を守るため、母は僕一人を玄関の外に出しました。5歳の僕は、裸に紙おむつの格好で、住んでいた集合住宅の階段を降り、たどり着いたのがパチンコ屋さんでした。警察に保護され、児童相談所に連れていかれました。

数日たち、家に戻りましたが、状況が変わる訳ではなく、8歳の時に家族と離され、児童養護施設に預けられました。施設にいること、障がい者として見られることがとても嫌で、普通の人にあこがれ、普通の人になることが、その頃の夢でした。

時は流れ、養護学校高等部で陸上部に入部。長距離の選手として、大会に出場することになりました。県の大会では楽勝だったものの、全国大会となるとレベルが高く、結果は最下位でした。それがとても悔しくて、どんどん陸上競技にのめり込んでいきました。その結果、翌年は二位に入賞。指導してくれた先生には、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

3年生のとき、企業体験の現場実習で、夢成株式会社に行きました。お店の掃除を任せられ、掃除をする僕に、「中途半端な気持ちでやるならやらなくていい！帰っていいよ！」と、社長から叱られました。内心、「自分は実習中なのに……」と思いました。悔しくて徹底的に掃除をしました。すると、「やれば出来るじゃん！」と、今度は褒めてくれました。僕を本気で叱り、また褒めてくれた！僕を見ていてくれたことが、とても嬉しかったです。社長の姿、そこで働く人たちの姿を見て、この会社で働きたいと本気でそう思いました。僕の気持ちを知って、会社の人たちは長い時間をかけて話し合いをしたそうです。障がいへの不安、家庭環境への不安。でも企業理念に照らし合わせ、僕の採用を決めて下さいました。

その企業理念とは「思いやり溢れる全員経営」。

この理念の元、全力で働く仲間と共に、僕も全員経営の一員として働きました。社会人2年目、仕事にちよつと自信がついてきた頃です。「もつとお客さんのこ

とを考えて!」「理念と照らしたら、こういう行動だよ!」と、僕は思ったことを口にしました。しかし、気持ちばかりで自分が一番できていない。自分勝手な行動で迷惑を掛けることもあり、職場から逃げたいと思うようになりました。

この頃の2010年10月、知的障がいのあるアスリートが出場するスペシャルオリンピックの予選会に出場した結果、アテネ大会への出場が決まりました。しかし、仕事がうまくいかなくて孤立していたこともあり、気分は後ろ向き。陸上の練習と仕事、どちらも「めんどくさい」と考えるようになっていました。

そんな中、翌年の「311」、東日本大震災の発生!! 僕のいた郡山市も、震度6弱の揺れにおそわれました。言いようのない恐怖と不安。お金があっても、食べ物、水、電気、ガス、ガソリンなど、何一つ手に入らない。更に追い打ちをかけたのが原発事故。何を信じていいのか、分からない状況でした。

でもそのような中でも、仲間達は今自分ができること、他人のために出来ることを必死で考え、行動していました。その姿が、僕にとって一番の支えでした。

「僕にも何か出来ることは無いか?」

そう考えていると、「ヒーローは、走るの得意だろう! スペシャルオリンピックスに出て、金メダル取ってこいよ!」、福島は元気だって、負けてないって、世界中の人に伝えてこいよ!」と、仲間たちが声を掛けてくれました。その言葉に、「スペシャルオリンピックスで勝ちたい!」と、心からそう思いました。

震災により、スペシャルオリンピックススの開催が危ぶまれ、日本選手団の出場も白紙になっていましたが、僕は福島の街を、毎朝走り続けました。仲間達は、僕の練習のために仕事の時間を替わってくれました。そんな想いが届いたのか、スペシャルオリンピックスの開催と日本選手団の参加が決まりました。

2011年6月、アテネに到着すると、極度の緊張、プレッシャー、慣れない環境で、体調不良に見舞われました。こんな状態で走って勝てるのか? 不安な気持ちでいっぱいでした。

大会当日、男子5000メートル。スタートラインに立ち、福島で頑張っている仲間の顔を想い、走る目的を再確認することで、一気に緊張が解け、不安感のないいいスタートが切れました。仲間、お店、福島、日本のことを考えて走りました。

その結果、なんと金メダル!!

チームで取った金メダルだと、強く想いました。日本に戻ると、仲間たちが笑顔で迎えてくれました。僕は気が付きました! 陸上も仕事も同じかも知れない。個人競技に見えても、本当はチームプレイ。みんながいるから、お客様の前という舞台に立つことが出来ているのだと。

子供の頃の嫌な過去を消すことはできませんが、夢成に出会い、これまでの人生は僕にとって必要な経験だったと、思えるようになりました。

僕が抱える障がいはいは軽く、今では人に気づかれることはありません。それでも普通の学校には進学できず、だから周りからは障がいがあるという扱いを受けてきました。こんな僕だから、弱者といわれる人の気持ちがかかります。心の中では皆、普通の人と同じ舞台で、同じ気持ちで働きたいのです。「出来ない、無理だ」ではなく、「出来る可能性」を信じてあげて下さい。

僕は、これまでたくさんの方々に支えられてきました。今度は僕が恩返しをする番です。仕事を通じて、たくさん「ヒーロー」が生まれる日本にしたいのです。臥龍さん、よろしくお願いします。

臥龍は、彼の話を聞きながら、鈴木代表の言葉を思い出していました。

夢成株式会社は、頂いたご縁に感謝し、恩返しを想えば、誰でもヒーローになれる、誰でもヒーロー誕生を応援出来ると思っています。今までがどんな人生であつても、誰でも夢を描き、叶えることができると思っています。